

# 八八艦隊海戦譜

## 攻防篇 1

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

## 目次

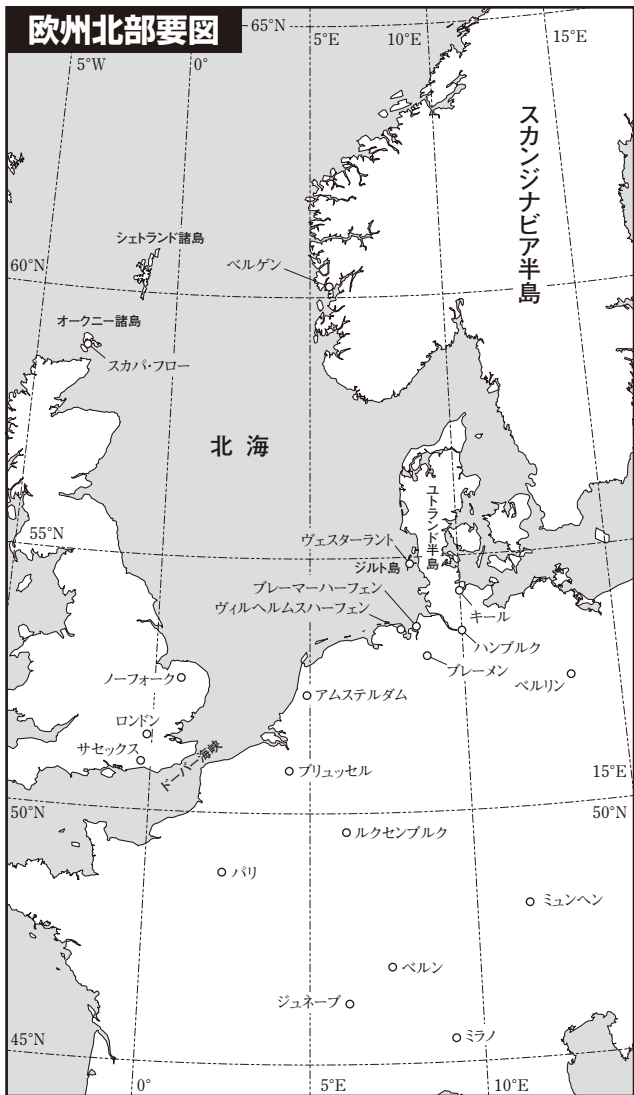
|     |             |     |
|-----|-------------|-----|
| 第一章 | 蘭印の火の手      | 9   |
| 第二章 | 長官勇退        | 19  |
| 第三章 | 米艦隊跳梁       | 43  |
| 第四章 | スカパ・フロー空襲   | 115 |
| 第五章 | 第二次ティモール沖海戦 | 167 |
| 第六章 | 浮上した雄図      | 233 |



# 南西太平洋要図



## 欧洲北部要图



# 八八艦隊海戦譜

—攻防篇 1—







# 第一章

## 蘭印<sup>らんいん</sup>の火の手

「水測より艇長。推進機音、左四五度。近い！」

水測長を務める児島太郎<sup>こじまたろう</sup>一等兵曹の鋭い声が、第三二号哨戒艇<sup>しょうかいてい</sup>の艦橋に上げられた。

第三二号哨戒艇は、旧式化した二等駆逐艦「葵」<sup>あおい</sup>を改装し、艦種変更したものだ。三基あった缶室を一基減らし、雷装も撤去する代わりに、近接用の火器と対潜兵装が強化された。

同艇は現在——昭和一六年五月一六日夜半、姉妹艇の第三一号哨戒艇と共に、蘭印の東部に位置するティモール島クーパンの西南西海上で、対潜哨戒に当たっている。

大本営が、南方作戦の終結を宣言したのは、今から半年近く前——昭和一五年一二月二〇日だ。

帝国海軍は、米太平洋艦隊、英東洋艦隊と、それぞれ二回ずつの海戦を繰り広げ、激闘の末に勝利を収めた。

陸軍もまた、米国領フィリピンの制圧を進める一方、英国の東洋支配の拠点だった香港、シンガポールを陥落<sup>かんらく</sup>させた。

内地は、次々と届けられる勝報に沸き返り<sup>わがえ</sup>、戦勝を祝う提灯行列の灯が、各地の街路を彩った。

だからといって、戦争が終わったわけではない。

いや、占領地の防衛や治安維持を委ね<sup>ゆた</sup>られた部隊にとつては、戦争は始まったばかりと言っている。

わけでも、蘭印を担当する第二南遣艦隊<sup>なんけんかんたい</sup>の役割は重要だ。

蘭印は、パレンバン、バリクパパン等の油田を有する他、鉄鉱石、ボーキサイト、生ゴム等、戦略物資の一大産地でもあるからだ。

蘭印における戦闘は、今年三月より始まっている。南シナ海、ジャワ海、フロレス海等の海で、米軍のものとされる潜水艦の出現が何度か確認されているのだ。

第三一号、第三二号哨戒艇は、敵潜水艦の侵入を

防ぐべく、モルッカ諸島のアンボンを拠点に、蘭印

東部の哨戒を受け持っていた。

「三一号に信号。『推進機音、左四五度、近』」

「<sup>とりかじ</sup>取舵一杯。針路二二五度」

第三二号哨戒艇の艇長を務める<sup>かしはらしめういち</sup>檣原修一大尉は、二つの命令を発した。

三一号、三二号両哨戒艇は、第二哨戒隊に所属しているが、司令は第三三号哨戒艇に乗っているため、この場では先任順位が高い檣原が二隻の指揮を執<sup>と</sup>ることになる。

「取舵一杯。針路二二五度」

航海長<sup>たざえゆきお</sup>田添雪夫中尉が、操舵室に命じる。

一〇〇〇トンに満たない小艇だけに、舵<sup>き</sup>の利きは早い。命令からさほど間を置くことなく、鋭い艦首が左に振られる。

時刻は、日本時間の二三時四一分（現地時間二二時四一分）。

夜空に月はなく、無数の星<sup>ほしあか</sup>灯りも、海面を明るく

する力はない。

闇<sup>ぐみ</sup>に包まれた海面を、二隻の哨戒艇は、敵潜<sup>ひそ</sup>が潜んでいるであろう場所に向かってゆく。

「推進機音、近づきます」

児島水測長が、新たな報告を上げた。

敵潜水艦は、接近して来る二隻に気づいていないようだ。

「主砲、砲撃準備。目標、本艦正面」

檣原は、射撃指揮所に指示を送った。

前甲板で、一二センチ単装砲<sup>ぎょうかく</sup>が仰角をかけ、正面を睨<sup>にら</sup>む。

トラック沖や小笠原諸島沖で、敵の主力と撃ち合った巨砲——紀伊<sup>きい</sup>型戦艦や加賀<sup>か</sup>型戦艦の四〇センチ砲、<sup>つるぎ</sup>剣型巡洋戦艦の四六センチ砲に比べれば遙<sup>はる</sup>かにささやかだが、潜水艦との撃ち合いならこれで充分だ。

二隻の哨戒艇は、速力を八ノットに抑えたまま、忍び寄るようにして近づいてゆく。

「正面に注水音！」

児島の声が、唐突に飛び込んだ。

敵潜が哨戒艇の接近に気づき、急速潜航に移ったのだ。

直後、三三二号の左後方から一条の光芒が伸びた。

三三二号の艇長 泉田健次郎大尉が、敵潜が潜没する前に仕留めるべく、照射を命じたのだ。

「目標、正面の敵潜水艦。砲撃始め！」

樫原が大声で命じたとき、全く唐突に、複数の閃光が左舷前方にほとばしった。

「敵艦、左四五度、五〇（五〇〇〇メートル）！数は二隻。駆逐艦らしい！」

「駆逐艦だと?！」

見張員の叫び声を聞いて、樫原は悲鳴じみた声を上げた。

哨戒艇と駆逐艦では、戦闘力がまるで違う。

三三二号、三三二号は、一二センチ単装砲二基を搭載するだけで、他には二五ミリ連装機銃一基、単装機

銃四基だけだ。爆雷の数は多いが、水上艦艇に対しては何ほどの役にも立たない。

一方、米駆逐艦の兵装は、一二・七センチ単装砲を四基から五基程度。魚雷発射管も装備する。

これまで蘭印に出現した敵艦は、全て潜水艦であり、日本側も対潜哨戒にばかり力を入れていたが、米軍は水上艦艇まで繰り出して来たのだ。

敵弾の飛翔音が大気を震わせ、三三二号の正面に着弾する。

炸裂音と共に、海面に飛沫が上がり、艇体が微かに振動する。

「三三二号、三三二号、右に回頭。針路四五度！」

「司令部宛、緊急信。『敵艦見ユ。位置、クローパンヨリノ方位二四〇度、七五浬。二二五五』」

樫原は、恐慌状態に駆られて叫んだ。

敵潜水艦を仕留めるどころではない。敵駆逐艦から逃げ延びることが、全てに優先する。

「面舵一杯。針路四五度！」

田添航海長が操舵室に命じ、三一号に信号が送られる。

その間にも、敵駆逐艦が二度目の砲撃を行い、発射炎が瞬間的に艦影を浮かび上がらせる。

三二号が艇首を右に振り始めたとき、敵の第二射弾が落下した。

左舷前方に弾着の飛沫が見えたが、すぐに死角に隠れ、見えなくなった。

艦が直進に戻ったところで、

「両舷前進全速！」

「主砲、右砲戦。目標、右後方の敵駆逐艦！」

樫原は、二つの命令を矢継ぎ早に発した。

三一号、三二号の速力は、最大一八ノット。一方米軍の駆逐艦は、三六、七ノットを発揮する。

常識的に考えれば、とても逃げ切れるものではないが、ティモール島の西南西には、ロティ島という小島がある。この島の陰に隠れることができれば、敵を撒くことは不可能ではないはずだ。

右前方には、三一号の姿が見える。艇尾が激しく泡立ち、最高速度を発揮していることが分かる。

その後部に発射炎が閃き、三二号にも砲声が轟く。二隻の哨戒艇は、応戦を開始したのだ。

三二号の右舷正横と三二号の艦尾付近に敵弾が落下し、夜目にも白い飛沫が上がる。

「敵距離四五（四五〇〇メートル）！」

後部見張員が、新たな報告を上げる。

「全艇、爆雷を投棄せよ！」

重大なことに気がつき、樫原は命じた。

三一号、三二号は、後部に爆雷六〇発を搭載している。これに敵弾が命中し、誘爆を起こしたら、轟沈は必至だ。

爆雷を無駄に捨てるのは勿体ないが、今は二隻の哨戒艇と乗員を無事に連れ帰ることを最優先に考えねばならない。

前を行く三一号の艇尾から、次々に爆雷が海中に投げ落とされ、白い飛沫がさかんに上がる。

爆雷の投棄に当たっている下士官や兵は、生きた心地がしないであろう。敵弾が繰り返し飛来し、後部の二番主砲が砲撃を繰り返す中での作業だ。

「頑張ってくれ。頼む。頑張ってくれ」

三一号の艇尾や、敵弾が噴き上げる飛沫を見つめながら、樫原は呟いた。艇長としては、届かない声援を送ることしかできなかった。

「敵距離四〇（四〇〇〇メートル）！」

新たな報告が上がった直後、三一号の後部に爆炎が躍った。

塵を思わせる黒いものが多数、艦の左右や後方に飛び散る様子はつきりと見えた。

砲撃を続けていた二番主砲が沈黙する。敵弾は主砲を直撃し、一撃で爆砕したようだ。

炎は燃え盛り、三一号の姿を赤々と浮かび上がらせている。

その三一号の艦尾に、新たな爆発光が閃いた。

束の間、先の被弾による火災炎が、一〇倍以上の

大きさに膨れ上がったように見えた。

次の瞬間、轟然たる炸裂音を残して、三一号の姿が湧き起こる炎と黒煙の中に消えた。

「やられた……！」

樫原の口から呻き声が漏れた。

最初の被弾は、三一号の二番主砲を破壊し、火災を起こさせただけに留まったが、二発目の直撃弾が致命傷となった。

艇尾に命中した敵弾は、まだ投棄が終わっていないかった爆雷をいちどきに誘爆させたのだ。

全長八八・四メートル、全幅七・九メートル、基準排水量九四〇トンの小艇など、ひとたまりもなかったであろう。

三二号は、針路も速度も変えることなく避退を続ける。

燃え盛る僚艇を横目に見、火災煙の直中を突っ走る。

大量の黒煙が煙幕代わりになったのか、束の間敵

の砲撃が止むが、一分と経たぬうちに再開される。

艇の後部からは、一二センチ砲の砲声が断続的に聞こえるが、「命中」の報告は一度もない。

新たな敵弾が飛来し、三二号の右舷付近に弾着の飛沫が上がったとき、

「右前方に島影！ ロティ島のようにです！」

見張員の報告が、艦橋に飛び込んだ。

樫原は、右前方を注視した。

水平線付近の星々が、陸地の影によって遮られて  
いる。ロティ島の稜線だ。

(逃げ切れるかもしれない)

樫原の胸に、希望が浮かぶ。

あと少し、島陰に入るまでの間、直撃を免れれば  
いいのだ。最悪の場合には、座礁して乗員だけを  
救う方法もある。

「航海長——」

田添に、その声をかけたときだった。

敵弾の飛翔音が背後から迫り、急速に拡大した。

数秒後、衝撃が三二号の艇体を揺るがし、炸裂  
音や破壊音が艦橋に伝わった。

「砲術より艦長。二番主砲損傷！ 火災発生！」

砲術長坂東明中尉が、切迫した声で報告する。

「消火急げ！」

樫原は、わななく声で命じた。

後部で生じた火災は、二隻の敵駆逐艦にとり、格  
好の射撃目標になる。

「航海長、蛇行だ！」

樫原の命令に、田添が眼を斜めた。

「それでは、敵に追いつかれます！」

「敵弾をかかわす方が先だ！」

「分かりました。面舵！」

田添が操舵室に命じたとき、新たな直撃弾炸裂の  
衝撃が、旧式駆逐艦を改装した哨戒艇の小さな艇体  
を揺るがし、きしむような音が艦橋まで届いた。

直撃弾の衝撃が収まったとき、樫原は違和感に気が  
ついた。

田添が面舵を命じたにも関わらず、三二号は左舷側に回頭を始めている。

「もしや……」

樫原が不吉な予感を覚えたとき、

「艇長、舵故障！」

田添が、血の気の引いた顔を向けて叫んだ。

「駄目か……！」

樫原は、こみ上げてくる絶望に喘いだ。

艇が勝手に回頭を始めたところから見て、舵機室をやられた可能性が高い。制御を受け付けなくなった舵が、艇を勝手に変針させたのだ。

人力操舵に切り替えるだけの時間はない。三二号の運命は、決まったも同然だった。

回頭に伴い、死角に隠れていた敵駆逐艦が、視界に入ってくる。

その艦上に新たな発射炎が閃き、ごつごつした艦橋や角張った主砲が、瞬間的に浮かび上がった。

ほとんど同時に、三二号の前部に発射炎が閃いた。

回頭に伴い、敵艦を射界に収めた一番主砲が、砲撃を始めたのだ。

（砲術長は——いや、この艇は、まだ諦めていない。駆逐艦から哨戒艇に身を落としたが、最後まで戦う軍艦であり続けようとしている）

そんな思考が樫原の脳裏をよぎったとき、これまでにない激しい衝撃が襲いかかり、艦橋内の全員がなぎ倒された。

——樫原が最後に思った通り、三二号の一番主砲は、艦橋を破壊された後も、なお砲員独自の判断で砲撃を続けたが、通算五回目の発射を終えた直後、直撃弾を受けて沈黙した。

二隻の米駆逐艦は、火器による抵抗も、回避もできなくなった第三二号哨戒艇に、なおも砲撃を浴びせ続けた。

三二号は三一号のような誘爆を起こすことなく、海面下に姿を消すまでに、二〇分ほどの時間を要した。



ロティ島の近くでこの日行われた水上砲戦は、参加艦艇が哨戒艇二隻だけだったこともあり、大本営による公称が定められることはなかった。

この小規模な戦闘が、蘭印を巡る長い戦いにおける最初の水上砲戦であったことを知る者は、帝国海軍にはまだいなかった。



## 第二章 長官勇退

## 1

ハッチを開けると同時に、熱帯圏に特有の強烈な陽光が差し込んできた。

アメリカ合衆国海軍に所属する潜水艦「スピアフィッシュ」の艦長マイケル・ヴォーン少佐は、まぶしさに顔をしかめながら、司令塔の上上がった。

ジャワ海のほぼ中央。ジャワ島北岸の要港スマランの北、約一三〇哩の海域だ。

二ヶ月余り後には、蘭印——オランダ領インドシナを巡る最初の水上戦闘が生起することになるが、ヴォーンも、「スピアフィッシュ」のクルーも、そのようなことを知る由もない。

現在——一九四一年三月一〇日の時点では、蘭印で行動中の合衆国海軍艦艇は、潜水艦以外には存在しなかった。

「周囲には、艦影も機影もなし……か」

ひとりごちたヴォーンに、続けて上がって来たビル・ジャクソン兵曹長が言った。

「何だか、拍子抜けしたような気分ですな。これだけ警戒が緩いとは、思っていませんでした」

「戦勝続きで浮かっているのかもしれない、ジャツプは。だからこそ、俺たちに付け入る隙があるってものだが」

——昨年九月一二日の対日開戦以来、合衆国海軍は、敗北を繰り返してきた。

開戦劈頭のトラクク環礁に対する奇襲は、日本軍の待ち伏せにあつて失敗に終わり、第二任務部隊は作戦に参加したレキシントン級巡洋戦艦六隻のうち、三隻を失って敗退した。

続く硫黄島沖海戦では、太平洋艦隊司令長官ジョン・O・リチャードソン大將が、自ら主力の戦艦部隊を率いて、日本海軍連合艦隊に正面から決戦を挑んだが、結果はトラクク沖海戦以上の大敗となり、戦艦八隻、空母一隻、巡洋艦六隻、駆逐艦一五隻を

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF  
形式で、作成されています。この続きは  
書店にてお求めの上、お楽しみください。